

日交研シリーズ A-727

H29 年度自主研究プロジェクト

「道路上の異モード間コミュニケーションの生起と社会的受容」

刊行：2018 年 10 月

道路上の異モード間コミュニケーションの生起と社会的受容

Occurrence and social acceptance of communication between different modes on the road

主査：谷口 綾子 (筑波大学)

Taniguchi Ayako

要 旨

自動運転システムなど、新たな交通モードの社会的実装が間近に迫っている。一方で、街路空間整備についても、これまでの歩車分離型から、歩車共存型とも言うべき Shared Space という新しい概念が台頭している。本研究では、交通事故の一因として、道路を利用する様々なモード間のコミュニケーション不足・コミュニケーションの失敗が存在すると考えた。道路上の異モード間のコンフリクトは、新しい交通モードや空間デザイン概念の導入により、今後、いっそう複雑化・多様化することは間違いない。安全かつ快適で質の高い交通体系の構築に向けて、道路上の諸課題に対応する一助とするため、本研究では「道路上の異モード間コミュニケーション」に着目し、以下の二つを研究目的として研究を進めた。

目的 1： 道路上の異モード間コミュニケーションが活性化する条件・プロセス・空間デザインを質的・量的に明らかにすること

目的 2： 自動運転システム等、新しい交通モード、空間デザイン概念の社会的受容に必要な条件・プロセス・現状の社会的受容レベルを、質的・量的に明らかにすること

2017 年度は三回の研究会や自動走行実験の視察等における議論を経て、(1)鉄道や路面電車等がかつて新技術として導入された時の産官民の対応を文献調査により明らかにするとともに、(2)歩行空間における小型パーソナル・モビリティを、歩行者がどのように評価するかについて VR 実験より明らかにした。さらに(3)東京 23 区と愛知県民を対象としたアンケート調査より、自動運転システムの社会的受容とリスク認知の関係性を明らかにし、(4)愛知県における自動運転実証実験前後の社会的受容の変化、ならびに、(5)名古屋大学 COI で実証実験中の「ゆっくり自動運転」の概要と、(6)ゆっくり自動運転に対する社会的受容性の質的条件、を明らかにした。

キーワード：自動運転，コミュニケーション，社会的受容

Keywords: Autonomous Vehicles, Communication, Societal acceptance